

## パソコン通信の基本的性格に関する一考察(その1)

——そのメディアとメッセージの側面を中心に——

荒 木 功

本稿は、変化の激しい今日の情報化社会にあって、その中核を形成する情報やコミュニケーションに関わる領域で進行しつつある新たな事象について考察することを主要な目的としている。むろん、そうした領域や事象といってもその範囲は広く種類も多様であるが、ここでは特に新たなコミュニケーションの形態として注目される「パソコン通信」について取り上げることにした。なぜなら、それはここ数年の間に急速に普及・拡大しつつあり、近い将来には社会の様々な分野でも大きな役割を担い、我々の日常生活にもかなりの変化をもたらすことになると思われるからである。

ところで、パソコン通信については、今から5～6年前にはその言葉すらほとんど知られておらず、ニューメディア関係の『用語辞典』にさえその記載はないという状態であった<sup>1)</sup>。ところが、それはここ数年の間に急速に広まり今日では既に日常語として定着しているばかりではなく、ある意味ではパソコン通信自体がそれ以上の勢いで普及しつつある感さえある。こうしたことはコミュニケーションの形態としても、また一つの社会現象としても興味ある事実であり、その解明が必要であると思われるにも関わらず、その研究はまだほとんど着手されていないのが現状である。こうした状態を考慮すれば、まずなによりも必要なのはコミュニケーションの社会学的研究という視角から、可能な限りその基本的な性格や特徴の全体的な把握を試みることであると思われる。それにまた、そうした作業を行なうことは、この後パソコン通信に関わる個別的な事例や側面について検討するに際しても、それに必要な手掛りやパースペクティブを得ることになると考えられるからである。

そこでまず、パソコン通信という言葉の意味を明確にすることから始めるとすれば、それが「パーソナル・コンピュータ」(personal computer)の日本語に特有な省略形である「パソコン」と、工学的な側面に比重をおいた「通信」を合成したものであることは明らかである。ちなみに、英語ではそれに相当するものとして、personal computer communication という表現が使われることもあるが、それよりはむしろ telecomputing という語のほうが一般的であるように思われる。さらに、telecommunication という言葉もあるが、これは「電気通信」という日本語訳があるように、パソコン通信をその一部に含むとしてもそれよりかなり広い概念であると考えべきであろう。いずれにせよ、その意味はコンピュータによるコミュニケーションということであり、多少広く考えても「コンピュータ」と「コミュニケーション」に関わ

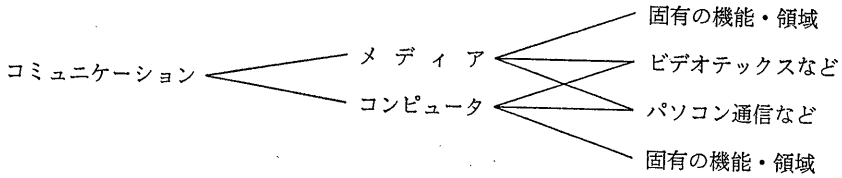
るものであることは間違いないであろう。ここではこの二つの概念自体を詳細に検討する余裕はないが、少なくともパソコン通信については、それらの概念を踏まえて検討してみることが必要なことであるように思われる。

ところで今日、情報化や情報化社会と言えば、コンピュータの普及やその利用、つまり社会の「コンピュータ化」を指すというのが一般の理解であるし、それが我々の扱う情報を高速かつ効率的に処理する有用な道具であることも確かである。しかし、情報を扱い処理するという点では、我々はこれまでも様々な道具を保有し使用してきたことを見落してはならない。つまり、コンピュータと同じく近代科学・技術の成果を利用した情報処理装置のもう一つの系列としていわゆるコミュニケーションに関わる様々なメディアがあるということである。コンピュータに比べれば今日では余りにも日常化した存在であるため意識されることが少ないとしても、マス・メディアを始めとする近代的なメディアが我々の情報の生産・流通・消費の形態を大きく変えてきたことは明らかである。とはいえ、メディアはあくまで「コミュニケーション」の手段であり、コンピュータは「情報処理」の道具であって、両者は異なるものだという意見がないわけではない。しかし、コンピュータの場合であっても、決してその情報処理自体が目的ではなく、その結果を他者に提示し他者と共有することが重要なのである。このことからすれば、コンピュータも本質的にはコミュニケーションに関わるものなのであって、その意味ではメディアと同じくコンピュータもコミュニケーションの道具に他ならないのである。

それにもかかわらず、両者が異種の装置と見られがちなのは、それらが異なる時代と技術的背景のもとに開発され成長してきたことによるのであろう。しかし、メディアとコンピュータをめぐる事態は、前者が電氣的・電子的装置へと移行し、使用される信号がアナログからデジタルに転換されて行くにつれて、それらが相互に接近し融合しつつあるのが現状である。事実、ニューメディアと呼ばれるメディアの多くはコンピュータと結合したものであるし、それは従来のマス・メディアでも部分的には既に進行してきたことなのである。それにまた、コンピュータ自体も今日単体で使用される状態からオンライン化・ネットワーク化されることによって、ますますコミュニケーションの道具としての性格を明らかにしつつあるのである。そもそもこうした事態がそれぞれの領域であるいは相互に進行しているのは、そのいずれもが本質的に広義の情報処理に関わる道具であり、人間の社会的コミュニケーションの手段であるからに他ならない。こうしたメディアとコンピュータをめぐる事態の展開については、「メディアのコンピュータ化」あるいは「コンピュータのメディア化」と呼ぶこともできるであろう<sup>29</sup>。

まさに、パソコン通信はコンピュータのオンライン化・ネットワーク化によって成立したものであり、コンピュータのメディア化を最も端的に体现したものである。ここでパソコン通信について検討しようとしたのも、それが他のどのメディアよりもその点に特徴をもつ新たなコミュニケーションの形態であるからに他ならない。また、それを新たなメディアの成立と見るならば、それはまさに「ニューメディア」と呼ぶに相応しいものであるとすることができる。

## 第 1 図



このパソコン通信というニューメディアは、既存のマス・メディアは言うまでもなく、他の多くのニューメディアとも異なる独自の形態や性格を示している。これがまた、ここでパソコン通信を検討しようとした第2の理由である。さらにまた、ニューメディアということでは、盛んに喧伝されながらもまだ普及・利用が進んでいないものが多くあるなかで、単に言葉のみならずそのメディア自体が現実に拡大しつつある事実があること、これがその第3の理由である。また、従来のマス・メディアにせよニューメディアにせよその多くが大規模な設備や資本を必要とする公的なメディアであるのに対して、パソコン通信はそれほどの設備を必要とせず、しかも家庭などの私的な場所で個人が比較的容易に使用しうるプライベートなメディアという性格をもっていること、これがその第4の理由である。したがって、これがさらに普及し利用が進めば単にコミュニケーションの領域のみならず、我々の社会生活の様々な側面にも大きな変化をもたらす可能性をもっていること、これがその第5の理由である。

パソコン通信は、今まさに登場したメディアであり、新たなコミュニケーションの形態であるがゆえに、物理的・工学的装置やその技術的側面はともかく、その他の側面については全体的にも部分的にも、また理論的にも実証的にも的確に把握され検討されているとはい言難い状態にある。特にパソコン通信に関しては、なによりもそれがコミュニケーションの手段であることを基本的な性格としている以上、少なくとも社会的コミュニケーションという観点からの検討が不可欠であるように思われる。しかし、この領域においてさえまだそれについての適切な規定すら見当たらない状況を考えれば、改めて基礎的な側面から検討していかざるを得ないであろう。

そこで、その出発点としてこれまで述べてきたことの要点を示せば、それは、いずれにせよパソコン通信が新たなメディアであり、新しいコミュニケーションの形態であるということに尽きるであろう。むしろ、それがメディアとしてもコミュニケーションの形態としても新しいことは事実であるとしても、問題はそれがどのような意味でそうなのかということである。そこで、上に述べたことを少しくパラフレーズすることによって、その点を明らかにしてみることになろう。まず、その前半については、それをコンピュータ、特にパソコンを使用した新たな通信システムであると言い換えてもよいだろう。さらにこれは、通信機能をもつパソコンを端末とした通信システムであるとするほうが適切であるかもしれない。ただし、このシステムについては、ここではそれをあくまで物理的・工学的に構成されたハードウェアのレベルにあ

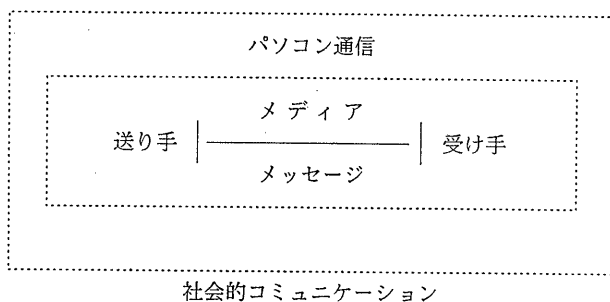
るものとして捉えているということを明らかにしておかねばならない。またその後半については、人びとがこのメディアとしての通信システムを用いて遂行する新しいコミュニケーションの形態であると言ってもよいだろう。これを多少とも具体的に述べれば、パソコン通信のシステムを使用して多数の人びとが多様なメッセージを伝達する活動であると言える。要するに、パソコン通信というのは、人びとがパソコンを端末とした通信システムを使用して様々なメッセージを伝達・交換する社会的コミュニケーションの形態であると言える。

むしろ、ここでは改めてそれをより基底的な意味をもつ「コミュニケーション」という概念に遡って究明する余裕はないが、少なくとも「社会的コミュニケーション」ということについて言えば、それが「社会における個体間伝達」を意味するものであることは言うまでもない。むしろ、その個体は個人と集団を含むが、社会的コミュニケーションで重要なのは、その個体間で「なんらかの記号によるなんらかの意味の伝達」が行なわれることである<sup>3)</sup>。したがって、社会的コミュニケーションとしてのパソコン通信は、人間が相互に意味を担った記号を伝達・交換する行為として、つまり、それに関与する個人もしくは集団の行為ないし活動として捉えることが重要であるということになる。だから、ここでメディアやメッセージを中心に考察すると言っても、それら自体を自立的、自足的なものとして扱うのではなく、そうした個人や集団のコミュニケーション活動の一環を構成するものとして見ることを基本としなければならないのである。つまり、パソコン通信を社会的コミュニケーションとして見るということは、人びとがそれを用いて行なうコミュニケーション活動として捉えるということに他ならない。

このことを前提とした上で、さらに明らかにしなければならないのは、我々が対象とする社会的コミュニケーションとしてのパソコン通信についてはどのようなフレーム・ワークの下で、どのような側面を捉えるのかということである。ここでいうフレーム・ワークは、社会的コミュニケーションの分析に関わるものであるが、その設定のためにはこれまでの社会的コミュニケーション研究における分析枠組あるいは分析モデルなどを参考にすることも意味のないことではないだろう。むしろ、それにも多くのものがあり、その目的やそれを構成する要因の設定なども様々であるが、とりあえずここではある意味で簡明な形をとる。D. K. パーロ (Berlo) の SMCR モデルに依ることにして<sup>4)</sup>。

そこでまず、このモデルに従って「社会的コミュニケーション」を分析するフレーム・ワークを構成する基本的要因をあげれば、「送り手」、「メッセージ」、「チャンネル」、「受け手」の4つになる。そのうち「チャンネル」は「メディア」と基本的には同義であるので、ここではそれを「メディア」と言い換えることにする。これらを先に述べた要約に則して言えば、「メディア」はハード・ウェアのレベルで存在するパソコンを端末とする通信システムそれ自体であり、「メッセージ」はそのシステムを通じて伝達されるさまざまな記号の類ということになる。また、「送り手」および「受け手」はそのシステムを使用してメッセージを伝達・交換す

## 第 2 図



る人びと、およびそのシステムを運営する集団あるいはそれに所属する人びとのことになる。

第2図は、我々のパソコン通信の考察にとって中心となる基本的要因とそれらの相互関係を、分析のフレーム・ワークという観点から整理して示したものである。その意味するところは、まず第一に、パソコン通信は社会的コミュニケーションの一つの形態であり、社会的コミュニケーションとしてのパソコン通信は上述した基本的要因から成るということである。第二に、その図からも明らかなように、それらの要因間には次のような2組の対比関係が見られるということである。つまり、その一つは、いわばパソコン通信の中核をなす二つの要因によって形成されるメディア／メッセージという対比であり、もう一つは、それらと送り手あるいは受け手というコミュニケーション上の役割をとる人間とで構成されるメディア・メッセージ／送り手・受け手という対比である。これを言い換えれば、人間がコミュニケーションを行なうのに用いる手段と人間との対比であると言うことができる。したがって、この二つについて要約すれば前者はその手段に内在する対比であり、後者は人間とその手段との対比であると言える。手段と人間の関係ということ言えば、人間は手段なしには何事もなしえないし、また何かをなすためには手段に働きかけなければならない。この意味では、パソコン通信においても、その送り手であれ受け手であれそのメディアとメッセージなしにはそれを行なうことはできないし、またそれを行なうためには送り手も受け手もメディアやメッセージに働きかけなければならない。こうした意味でもパソコン通信について考察するに当たっては、メディアやメッセージの検討は欠くことのできないことであり、我々がここで、メディアとメッセージという要因の分析から始めることにしたのもそのためである。

さらに、そのフレーム・ワークに関して触れておく必要があるのは、メディアとメッセージの対比とそれによって生じる分析レベルの問題である。むろん、ここでいうメディアは、物理的・工学的に構成された通信システムそれ自体であり、メッセージはある意味でそれに依存し規定されたものではあるが、分析的にはそれぞれ異なるレベルに属するものとして区別しておかねばならない。そこで、ここでは前者をパソコン通信のシステムのレベルと呼び、後者をそのコミュニケーションのレベルと呼ぶことにする。後者をコミュニケーションのレベルと呼ぶのは、このレベルに属するメッセージの伝達・交換がまさに社会的コミュニケーションの実質を

形成するものだからである。

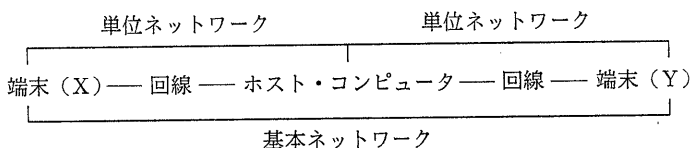
### システムのレベル

それでは、まずパソコン通信の基本的要因としてのメディアの性格や特徴を、そのシステムのレベルにおいて見て行くことにしよう。

このメディアについてこれまで述べてきたことを改めて示せば、なによりもそれはコンピュータ、特にパソコンを端末として使用した通信システムであり、物理的・工学的に構成されたハード・ウェアとして成立しているものであった。これをさらに具体的に述べれば、通信機能を付加した端末としての複数のパソコンを、電話回線などを通じて他のコンピュータを経由して接続し、それら相互の通信を可能にしたシステムであると言える。ここではこうしたメディアの構成を全体としてパソコン通信のシステムあるいは単にシステムと呼ぶことにする。

ところで、このシステムの基本的な構成はつまるところコンピュータとコンピュータとを回線で結合したものであり、その意味では一般に「データ通信」と呼ばれているものと本質的な相違はない。しかし、なによりもパソコン通信の特徴であるのは、その片方の端末としてのコンピュータにパソコンが使用されていることである。他方、上で「他の」コンピュータと述べたのは「データ通信」でも同じであるが、「ホスト・コンピュータ」と呼ばれるものである。したがって、パソコン通信のシステムは一方にホスト・コンピュータがあり、他方には端末としてのパソコンがあり、それらを回線が接続するという構成になっていることになる。ここではこれをパソコン通信の単位ネットワークと呼ぶことにするが、あくまでこれは「単位」であってそれが2つ以上なければ実質的なパソコン通信とはならない。そこで、そのホスト・コンピュータにもう1台のパソコン端末が接続されている状態、すなわち2つの単位ネットワークからなるものをここでは基本ネットワークと呼ぶこととする。これから後、このメディアについて検討するに当たっては、多くの場合これを基本として考えて行くことになる。ここで述べたことを整理して図式化すれば次のように表わすことができよう。

第 3 図



今、この図の両端にあるパソコン端末に添えた変数XおよびYがともにAであるなら、これは1台のパソコン端末Aとホスト・コンピュータとの間で形成される閉じた回路つまり単位ネットワークを表わすことになる。また今度は、XがAでありYがBであれば、この回路はホスト・コンピュータを経由して端末Aから別の端末Bに展開した回路つまり基本ネットワークを示すことになる。しかし、通常のパソコン通信システムの状態は、XにもYにも多数のパソ

コン端末が接続しているのが一般的であり、また、このように構成された通信システムは、多数のパソコンを相互に接続した回線網を形成することになるので、ここではそれを一般にパソコン通信の「ネットワーク」と呼ぶことにする。

要するに、こうしたパソコン通信のシステムは、コンピュータとコンピュータを電話交換局を経由する回線で結んだものであるから、コンピュータに関わる部分と通信に関わる部分から成っていることは明らかである。そのうち、通信に関わる部分は主として公衆回線の利用であって、それには NTT や NCC (New Common Carriers) と呼ばれる新しい通信事業者の運営する電話回線が使用され、それに加えて通常の電話とは信号の伝送方式が異なる NTT の第二种パケット交換サービス (DDX—TP) や KDD の国際公衆データ伝送サービス (VENUS—P) が利用されることもある。通常パソコン通信の場合、この回線上では通信方式が半二重であれ全二重であれ、信号は双方向で伝達されており、その伝送速度は現在のところ 300bps, 1200bps が一般的であるが、なかには 4800bps などのものもある。この信号の送受に関しては通信プロトコルの問題などもあるが、それは我々の目的からすれば余りにも技術的な問題に関わることになるので、ここではこれ以上触れないことにする。

他方、パソコン通信システムのコンピュータに関わる部分は、ホスト・コンピュータと通信機能を付加した端末としてのパソコンである。前者はともかく、パソコンについては判然とした規定がないようであるが、一応その輪郭を示せば次のようになるだろう。それが小型のコンピュータであることは言うまでもないが、その構成は 8ビット、16ビットそれに 32ビットの処理能力をもつマイクロプロセッサを中心に、マン・マシン・インターフェースをなすディスプレイ、キーボード、プリンタ、さらには補助記憶装置などの周辺装置から成るのが普通である。さらに付け加えるとすれば、それは BASIC などの高級言語を用いてその使用者が自力でプログラミングできるものであって、価格的な目安としてはそうした基本的な機器構成で 300万円以下のものとされている<sup>9)</sup>。しかし、これはあくまでパソコンの一般的構成について示したものであって、それだけでは通信システムの端末として機能するわけではない。通常、パソコンがパソコン通信システムあるいはそのネットワークの一部を構成する端末として使用されるためには、それに加えて通信時に入出力インターフェース、通常は RS 232C から出入りする信号を A/D, D/A 変換する「モデム」、ないし「音響カプラー」を介してパソコンと電話回線などが接続されていなければならないし、この一連の装置・機能を統御するための「通信ソフト」もなくてはならないということである。

ここでパソコン通信に関して無視できないのがいわゆるワード・プロセッサ (word processor) の存在である。ワード・プロセッサ (以下、ワープロと略) は、その目的を文書処理に特化したパソコン・レベルの専用小型コンピュータであるといってもよいが、問題は特に最近このワープロに通信機能を付加し、「端末」として使用できるものが出現してきたことである。これによる通信をワープロ通信といって区別する場合もあるが、たとえワープロを端末

にする場合であってもそれが関わるのは、ここでいうパソコン通信そのものなのであるから、ここでは端末がワープロであるものをも含めてパソコン通信と考えることにする。

以上で、パソコン通信システムの構成、少なくともその基本的部分については述べたので、次にこうした構成をとるパソコン通信のシステムのレベルにおける性格や特徴を他のメディアと比較しながら明らかにして行くことにする。

まず第一に、これが端末としてのパソコンとホスト・コンピュータを使用するコンピュータ系のシステムであることは前述した通りである。むろん、これまでもその一部にコンピュータを組み込んだメディアやコンピュータを端末にしているものが無いわけではない。しかし、前者のタイプではほとんど端末の利用者が直接コンピュータを自ら操作する形態にはなっていないし、後者のタイプでもパソコン通信ほど端末の利用に関して使用者の関与の幅が大きいものは今のところないといってもよい。例えば、テレテキストにせよビデオテックスにせよその利用者は固定した少数の送り手にしかアクセスできないし、アクセスしたとしても限定された範囲のなかでしか情報の種類や内容の選択ができない状態になっている。それらに比較すればパソコン通信では、まずアクセスできるネットワークが数多くある上に、そのいずれかにアクセスした後も選択しえる情報の種類や内容が多様であるといった特徴を見ることができる。それに加えて、パソコン通信では、パソコン自体がもっている多様な情報処理機能を利用しえるという他のメディアにはない特徴がある。つまり、パソコン通信ではまさにパソコンをその端末装置とすることによって多機能的な情報処理能力を備え、少なくとも受信した情報に限ってもそれを蓄積・加工・変換するなど多様な操作をすることができるのである。これは、マス・メディアを含めた他の多くのメディアが、受信した情報を一定の方式でしか再生できないといういわば単能的な情報処理能力しかもっていないことと比較すれば明らかであろう。

第二に、パソコン通信というメディアのシステムは、回線によって相互に接続されているという点でケーブル系のメディアであると言うことができる。パソコン通信のみならず、ケーブル系のメディアに共通するのは閉鎖性ということである。この閉鎖性の意味するところは、例えば電波系で開放性のメディアであるテレビとケーブル系で閉鎖性のメディアとしてのCATVなどを比較すれば明らかであろう。つまり、開放性のメディアは受信する相手を個別的に特定することが困難であるのに対して、閉鎖性のメディアはそれが可能だということである。そのCATVはある意味で代表的なケーブル系のメディアであるが、それでもこれはいまだに従来の放送という概念を出るものではなく、単にそれをいわばケーブルに閉じ込めたものにすぎない。したがって、CATVの場合、受信する相手を持定するといってもせいぜい一定の地理的範囲に限定しているにすぎず、今のところその受け手をさらに個別的に特定するまでには至っていない。それに対してパソコン通信では完全に特定の相手と個別的なチャンネルを設定することが可能であり、ここにまたその大きな特徴を指摘することができるのである。

一般に、特定の相手と個別的に接続しうるメディアは「パーソナル・メディア」と呼ばれて



いるが、この意味ではパソコン通信システムを全体としてパーソナル・メディアと見なすこともできる。しかし、通常はそれを使用する個人が所有するのはその端末だけであるから、彼らにとってはその端末が実質的にパーソナル・メディアとしての意味をもつことになるであろう。こうした意味づけはまた、彼らがその端末の多機能的な情報処理能力を自らの手で操作できるということによっても強化されることになるだろう。ところが、パソコン通信が特異であるのは、このメディアが同時に多数の相手とも通信することができるということである。この点では、それは単なるパーソナル・メディアではないとも言えるが、今のところこのような相反する性格を同時に備えているメディアはパソコン通信以外には見出すことはできない。

このようなパソコン通信のメディアとしての特徴に加えて、さらにその性格として指摘できるのは、それがネットワーク性のメディアであり、双方向性のメディアであり、また非拘束性のメディアであるという点である。ネットワーク性ということは放送などでもそれを見ることができるが、ある意味でそれは単にその経路を延長したり、送り手としての参加者を多少増加させうるに過ぎず、パソコン通信のように接続された端末の数だけ送り手を増やすことができるものに比べれば非常に限られたものと言わねばならない。例えば、テレビのようなマス・メディアのネットワークは、直接キーステーションから電波を受ける場合もあれば、他の局を経由する場合などその形態は様々である。しかし、パソコン通信ではホスト・コンピュータを中心とし、それを介してすべての端末が接続されるという間接的接続の形態を取っているところに大きな特徴があると言うことができる。ここでは、これをネットワークの間接性と呼ぶことにするが、これがまたパソコン通信のシステムにとって極めて重要な意味と機能を担っているのである。ただ、このネットワークの間接性は、その端末の使用者にとってはほとんど意識されることがないというのも特徴的なことである。

次に、これが双方向性のメディアであるという点について述べれば、同じケーブル系のメディアであっても、従来の CATV はいいうまでもなく最近開局を始めた都市型 CATV でもその双方向性は部分的でしかも不十分なものでしかないが、このパソコン通信ではほぼ完全な双方向性が実現されていると言ってもよい。つまり、パソコン通信のシステムとして構成されているネットワーク上ではすべての通信が双方向性のものであるということである。また、パソコン通信に関しては、この双方向性が上に述べた間接性と関連することによって極めて複雑な通信の形態が出現してくることもなるのである。

最後の非拘束性というのは、時間的および空間的な非拘束性をともに含むものである。まず、時間的非拘束性について言えば、無線のような電波系の開放性メディアでは、送信と受信の同時性・即時性をもっているが、逆にその同時性・即時性が特にその受け手にとっては時間的拘束性をもたらすことになる。それに対して、パソコン通信では送信側でも受信側でも時間的な拘束を受けずに送・受信できるという特徴をもっており、その意味での時間的非拘束性があるということである。また、その時間的非拘束性に加えてこのメディアが空間的非拘束性をも備

えていることは、回線が接続されている限りではあるが、どこからでも、またどの端末にもアクセスすることができるという意味である。

以上で、パソコン通信システムの基本的な構成、あるいはそのメディアとしての基本的な性格や特徴などについて述べたので、次にはそのコミュニケーションのレベル、つまりそうしたシステムの基本的な構成や性格が社会的コミュニケーションとしての側面にどのような性格や特徴を付与しているのかということについて検討することにした。

これまで述べてきたことから明らかなように、パソコン通信の社会的コミュニケーションとしての特徴は、まず第一にそれが基本的にハードウェアに依存するコミュニケーションの形態であるということである。ただ、このパソコン通信については先端的技术の使用や操作の複雑性などのため、そのシステムや技術の側面が過度に強調されることがある。しかし、考えてみれば今日の社会的コミュニケーションはマス・メディアから電話やファクシミリにいたるまで、その多くが基本的にはハードウェアや技術に依存するコミュニケーションであることを忘れてはならない。メディアを使用するコミュニケーションはすべて間接的コミュニケーションの形態であるという意味では、パソコン通信も一つの間接的コミュニケーションの形態である。この意味での間接性はパソコン通信のコミュニケーションのレベルにおける間接性と呼ぶことができるが、同じ間接性と言ってもパソコン通信にとって重要であるのは、先に触れたシステムに内在するネットワークにおける間接性と呼んだものである。なぜならそれは単なるシステムのレベルを越えて、それに関与する人びとの間の関係にまで関わってくるからである。

この意味でのメディアと人間との関わりを検討するに当たって、ここではまず、人びとがパソコン通信に関与することによって生ずる相互の関係をコミュニケーション関係と呼ぶことにする。パソコン通信におけるこのコミュニケーション関係にとって重要な意味をもつのが、先に述べたパソコン通信のシステムに内在する間接性とそれに伴う機能である。改めてその間接性について述べれば、パソコン通信においてはすべての端末がホスト・コンピュータを介して「間接的に」接続されているということであった。この間接性を前提とする限り、パソコン通信に関与する人びとはホスト・コンピュータに関与する人びとと端末に関与する人びとに分れることになる。通常多くの場合、前者はホスト・コンピュータを設置しネットワークを運営する集団ないし組織という形態をとっているが、後者はほとんどが端末を使用してそのホスト・コンピュータにアクセスする個人である。一般に、前者についてはホスト局、後者はネットワーク参加者などと呼ばれているが、ここでは前者をネットワーク「運営者」、後者を端末「使用者」と呼ぶことにする。こうしたパソコン通信に関与する人びとの分化は結局、彼らがどの位置でそのシステムに関与するかということが生じ、また決定されるものであるから、ここではそれをコミュニケーション関係における地位と呼ぶことにしたい。

こうしたコミュニケーション関係についてマス・メディアの場合を見れば、通常そのメディアを設置し、運営する者は「送り手」と呼ばれ、そのメッセージを受けとる者は「受け手」と

呼ばれている。ある意味では、それぞれマス・メディアの場合でも例えばテレビ局「運営者」および端末としてのテレビ受信機「使用者」といってもそれほど不都合はないが、逆にパソコン通信の場合にはその運営者を送り手、端末使用者を受け手と固定的に呼ぶことはできない。なぜなら、パソコン通信では、運営者も端末使用者も同時に受け手でもあり、送り手でもありうるからである。この相違が生じるのは、前者がコミュニケーションの一方方向性を基本とするメディアであるのに対して、後者は双方方向性を基本とするメディアであるというその性格に相違があるからである。とすれば、少くともここで送り手あるいは受け手というのは、コミュニケーション関係における地位のようにシステムの構成によって決定される固定的なものではなく、いわばメディアの機能に依存して変化しうるある種の役割と見なすべきであろう。そこで、ここではそれをコミュニケーション関係における役割と呼んでその地位と区別することにすれば、上に見たマス・メディアとパソコン通信における人びとの関与の相違は、コミュニケーション上の地位と役割の関係の相違として見ることができる。つまり、前者では地位によって役割が固定しているのに対して、後者ではその地位と役割の関係が一義的ではないと言うことができる。つまり、パソコン通信では運営者も端末使用者も送り手、受け手いずれの役割をも随時自由に取りうるのだから、パソコン通信においてはそのコミュニケーション関係には、運営者—送り手、運営者—受け手、および端末使用者—送り手、端末使用者—受け手という基本的な4種類の組み合わせがあることになる。

ところで、パソコン通信においては、ネットワークの中心に位置を占めるホスト・コンピュータの能力が極めて重要な意味をもっている。というのは、それによってそのネットワークにアクセスできる端末の数やそこで提供されるメッセージの種類・量が決ってくるからである。メッセージの種類や内容については後に述べるとしても、ここではパソコン通信の規模という点について少し考えておくことにしたい。ここで言う規模とは、同一のホスト・コンピュータにアクセスすることのできる端末の数の相対的な大小によって決まるネットワークの大きさのことである。一般に、この意味での大規模なネットワークを構築しうるのは、大型のホスト・コンピュータや多くの回線を設置して運営することができるだけの資金と人員を動員しうる運営者に限られている。この点は、マス・メディアの場合も同様であると言えないこともないが、パソコン通信の場合にはそれほど費用を要せず個人でもパソコンをホスト・コンピュータとしてネットワークを開設することも可能であることを指摘しておかねばならない。ところが、この場合には一応ネットワークの規模が小さくなるとは言うものの、これは必ずしも従来のいわゆる「ミニコミ」に見られるような受け手の量や地理的・地域的範囲における制限を伴うものではないのである。なぜなら、パソコン通信ではその回線が接続されている限り、全世界の端末からそれにアクセスすることも可能であるし、時間の問題を別にすれば大規模なネットワークに接続しているのと同数の端末からでもアクセスが可能だからである。

また、パソコン通信がテレビなどのマス・メディアと異なるのは、その地位についてはとも

かく、送り手、受け手という役割の固定がないから、両者の量的不均衡も生じることがないということである。このような意味で、パソコン通信に類似した性格をもつメディアをあげるとすれば、「電話」が最も近いものであるように思われる。特に電話の場合は、そうした形式的側面に加えて個人が私宅で使用し、必要な時に必要な相手を選択的に呼び出すことができるといった実際の利用面でも、パソコン通信の利用状況と類似している。家庭という場で考えれば、マス・メディアは受信専用のメディアであるのに対して、パソコン端末と電話はともに送・受信機能を備えて、その内外を結びつけるという点でも類似した性格をもっていると言える。ただし、現在のところ、パソコン通信では文字などの視覚メッセージを主体とし、電話では話し言葉などの聴覚メッセージを中心に送受しているという点で相違があることを付け加えておかねばならない。

## 註

- 1) 例えば、日本放送出版協会編『ニューメディア用語辞典』日本放送出版協会 昭和58年。
- 2) 拙稿「研究ノート〈情報化〉私見」, 仏教大学編『仏教大学報』〈第37号 1987〉仏教大学 昭和62年 p. 11
- 3) 吉田民人「情報科学の構想」, 吉田民人・加藤秀俊・竹内郁郎『社会的コミュニケーション』〈今日の社会心理学4〉培風館 昭和42年 p. 206
- 4) C. K. パーロ著, 布留武郎・阿久津喜弘 訳『コミュニケーション・プロセス—社会行動の基礎理論』共同出版 昭和47年 p. 59
- 5) 日本情報処理開発協会編『情報化白書1987』コンピュータ・エージ社 昭和62年 p. 88